J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 20, No. 1 (2015) 135～141

自閉症児者への余暇支援に対する家族の捉え方

松　山　郁　夫

Recognition of Families on the Activity Support for the Leisure Activity of Children and Adolescents with Autism

Ikuo MATSUYAMA

要　　旨

本研究では、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して、自閉症児者を有する家族がどのように捉えているのかを、成人期とそれ未満の年齢の場合を比較して明らかにすることを目的としている。質問紙調査は自閉症児者を有する家族に対して、独自に作成した自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して意識する度合いを問う42項目により行った。分析は有効回答である189名のデータを基に、「20歳未満群」と「20歳以上群」の各項目間の平均値を比較すると９項目において有意差が認められた。自閉症児者を有する家族は、成人期になる前に、余暇を過ごす技能の獲得や様々な余暇活動の体験等を強く望んでいること等が考察された。

Key word：自閉症者、自閉症児者を有する家族、余暇支援

Ⅰ．はじめに

平成25年４月１日から、「障害者自立支援法」を「障害者総合支援法（障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律）」とするとともに、障害者の定義に難病等を追加し、平成26年４月１日から、重度訪問介護の対象者の拡大、ケアホームのグループホームへの一元化などが実施された。

障害者総合支援法第42条第１項に、「指定障害福祉サービス事業者及び指定障害者支援施設等の設置者は、障害者等が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、障害者等の意思決定の支援に配慮するとともに、市町村、公共職業安定所その他の職業リハビリテーションの措置を実施する機関、教育機関その他の関係機関との緊密な連携を図りつつ、障害福祉サービスを当該障害者等の意向、適性、障害の特性その他の事情に応じ、常に障害者等の立場に立って効果的に行うように努めなければならない。」と規定されている。このように、利用者のニーズに応じた支援をするように定められている。自閉症児者は社会適応に大きな困難を抱えている。また、自閉症の状態を捉えたり障害特性を理解したりすることには困難さがあるため、きめ細かな支援が求められる。

佐賀大学　文化教育学部　健康スポーツ科学講座

アメリカ精神医学会が作成した「精神疾患の分類と診断の手引き第５版」（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 5th edition, DSM-5）において、Autism Spectrum Disorder（自閉症スペクトラム障害）とは「社会的コミュニケーションと社会的相互作用における持続的な欠損」と「行動、興味、活動の限局的かつ反復的なパターン」の２つの障害特性を持つ神経発達障害と記述されている（APA 2013）[1]。

自閉症の多くは知的障害を伴うため、言語理解の遅れを示すものが多い。言語の発達がみられても、他者のことばをおうむ返しする反響言語があり、相手の意図や周囲の状況に考慮した会話は困難である（松山 2005）[2]。その障害特性により、自閉症児者には他者の感情を察知したり、相手の意図を考慮したりすることに問題がある。自閉症者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていく必要がある（Scheuermann 2002）[3]。自閉症児者の家族は療育支援に対して、自閉症児者が日常生活や社会生活において自分でできることを増やしていく、所謂自立に向けた支援の充実を望んでいる（松山 2013）[4]。自閉症児者の自立を目指した支援として、日常生活習慣、余暇活動、職業に関する技能を高めることが重要と指摘されている（Scheuermann 2002）[5]。これらのことから、自閉症児者の生活の質を高めるためには、福祉施設や学校等の生活の場における余暇活動に対する支援が不可欠と考えられる。

自閉症児者に対する余暇支援に関しては、学校教育における取り組みが求められる。特別支援学校では学習時間や行事等において余暇につながる内容に取り組んでいる（伊藤・菅野・橋本他 2007）[6]。義務教育あるいは特別支援学校の高等部を終えると、障害者支援施設等社会福祉の領域で余暇支援が行われることになる。障害者支援施設の生活支援員における自閉症者への余暇支援に関する認識について、生活支援員は自閉症者の気持ちを察し、その意思を推し量りながら、余暇活動を楽しめる支援をするように心がけている。しかしながら、多くの側面において、自閉症者への余暇支援の有効性に対する認識が否定的で、自閉症者に対する余暇支援の効果が得られていないと感じている。したがって、援助者の関わりの内容を整備していくという受容的交流を重視することが求められる。また、地域の社会資源を活用する余暇支援を重視し、地域における自閉症者に対する余暇支援のあり方を検討する必要がある（松山 2012）[7]。

自閉症児への余暇支援のあり方に関する質問紙調査を行い、自閉症児者とその家族における支援ニーズを明らかにすることを試みた結果、年齢によって支援ニーズは異なる可能性があり、こうしたニーズに柔軟に対応する必要性が指摘されている（黒山・高島・豊島 2011）[8]。自閉症児者を有する家族が、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して、どのようなことに関心を向けているのかを明らかにする必要がある。その際、自閉症児者の年齢や年代によって、支援ニーズに違いがあることも考慮すると、成人となった20歳以上とそれ未満の場合、各社会的支援のあり方に違いがあると考えられる。

以上より、本研究の目的は、自閉症児者を有する家族における、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場での余暇支援に対する捉え方を、成人期とそれ未満の年齢の場合を比較して明らかにすることとする。

Ⅱ．方 法

１．調査対象と調査項目

本研究では、自閉症児者を有する家族を対象として、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に関する独自に作成した質問紙調査を実施した。

調査対象は、日本自閉症協会に加盟している都道府県・政令指定都市自閉症協会に所属している自閉症児者を有する家族とした。合計198名の回答のうち、プロフィールに関する性別・年齢、自閉症のある家族の年齢・性別の欄にすべて記入がなされてあった191名のうち、自閉症のある家族が１名のみである189名の質問紙調査票を有効回答とし（有効回答率95.5％）、分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別・年齢、自閉症のある家族の年齢・性別・所属を付記した。

分析対象者のプロフィールは次のとおりである。

有効回答189名については、男性22名（11.6％）、女性167名（88.4％）、年齢は34歳から78歳で、平均52.7歳（SD 8.6）であった。その家族である自閉症児者は、男性161名（85.2％）、女性28名（14.8％）、年齢は７歳から53歳で、平均22.5歳（SD 9.4）であった。

自閉症児者が20歳未満である86名（「20歳未満群」とする）は、家族が男性10名（11.6％）、女性76名（88.4％）、年齢は34歳から59歳で、平均年齢46.1歳（SD 4.5）、自閉症児が男性74名（86.0％）、女性12名（14.0％）、年齢は７歳から19歳で、平均年齢14.4歳（SD 3.4）であった。

20歳以上である103名（「20歳以上群」とする）は、家族が男性12名（11.7％）、女性91名（88.3％）、年齢は40歳から78歳で、平均58.1歳（SD 7.3）、自閉症者が男性87名（84.5％）、女性16名（15.5％）、年齢は20歳から53歳で、平均29.2歳（SD 7.3）であった。

２．調査期間と調査方法

調査期間は、平成26年９月１日から10月30日までの２ヶ月間とした。

調査方法は、日本自閉症協会に加盟している各都道府県・政令指定都市自閉症協会53か所に、無記名で独自に作成した質問紙調査票を郵送にて配布し、回収する方法にて実施した。各協会に質問紙調査票を10通同封した。27か所（送付した協会の50.9％）から回答が得られた。

倫理的配慮として、質問紙調査票を郵送した協会に対して、調査の主旨とデータの分析に際しては、すべて数値化するため協会名は一切出ないこと、および回答への記入は無記名で行うことを文書で説明し、回答をもって承諾が得られたこととした。

３．調査内容と分析方法

質問紙調査票に使用する質問項目については、障害者支援施設における自閉症者への余暇支援に関する研究で作成したもの（松山 2012）[9]を使用した。その質問項目の作成に際しては、自閉症児者の生活支援を行っている障害者支援施設の生活支援員５人に、自閉症者の余暇を支援するときに意識していることを尋ね、複数回答があった42項目とした。

自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して意識する度合いを問う独自の42項目の質問項目を作成し、回答は「まったく気にしていない」（１点）、「あまり気にしていない」（２点）、「どちらとも言えない」（３点）、「ある程度気にしている」（４点）、「かなり気にしている」（５点）までの５段階評価とした。なお、各質問項目について等間隔に並べた１～５までの数字のうち、当てはまる数字に〇を付けるようにした。以上の質問項目への回答に対する分析方法として、自閉症児者の年齢が20歳未満の場合（「20歳未満群」）と20歳以上の場合（「20歳以上群」）における、各質問項目の平均値と標準偏差を算出し、対応する項目間でｔ検定による有意差検定を行った。

Ⅲ．結　果

自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して意識する度合いを問う独自の42項目の質問項目の「20歳未満群」と「20歳以上群」の各平均値と標準偏差、および両群の各項目間のｔ検定によるｔ値については表１の通りであった。

平均値が高い方から「20歳未満群」は「16．余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること」、「26．利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること」、「１．余暇を穏やかに過ごせるようにすること」、「25．個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと」、「38．利用者が楽しめる余暇活動については継続すること」、……、「20歳以上群」は、「１．余暇を穏やかに過ごせるようにすること」、「26．利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること」、「38．利用者が楽しめる余暇活動については継続すること」、「16．余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること」、「42．余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること」（16と42は同点）、……であった。各群の平均値が高い方からの５項目のうち、共通しているのは「１．余暇を穏やかに過ごせるようにすること」、「16．余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること」、「26．利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること」、「38．利用者が楽しめる余暇活動については継続すること」の４項目であった。

42項目の「20歳未満群」と「20歳以上群」の各平均値間を比較すると、９項目（全項目の21.4％）において有意差が認められた。これらすべての項目において「20歳未満群」の方が「20歳以上群」よりも平均値が高かった。有意差が認められた項目は、「６．余暇を過ごす技能を獲得すること」、「16．余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること」、「21．利用者がさまざまな余暇活動を経験できるようにすること」、「22．余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること」、「24．余暇活動の場所を確保すること」、「25．個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと」、「26．利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること」、「33．余暇活動の種類を増やすこと」、「39．地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと」であった。

表１． 自閉症児者への余暇支援における「20歳未満群」と「20歳以上群」の平均値・標準偏差・ｔ検定結果

番号　質問項目	「20歳未満群」平均	「20歳未満群」標準偏差	「20歳以上群」平均	「20歳以上群」標準偏差	ｔ値
１．余暇を穏やかに過ごせるようにすること	4.41	.621	4.31	.817	.898
２．余暇活動を継続的に行うこと	4.21	.705	4.07	.877	1.204
３．文化的な余暇活動を行うこと	3.59	.912	3.50	.979	.706
４．身体運動に関する余暇活動を行うこと	4.10	.783	3.95	.943	1.200
５．集団での余暇活動の楽しさを味わうこと	3.48	1.014	3.43	1.090	.321
６．余暇を過ごす技能を獲得すること	3.79	.995	3.40	1.060	2.606*
７．余暇活動を計画的に行うこと	3.83	.870	3.66	.955	1.234
８．余暇活動を支援するプログラムを作ること	3.56	1.013	3.46	.937	.717
９．障害特性に合わせた余暇活動を行うこと	4.13	.930	3.89	.928	1.729
10．利用者の地域生活を支える視点を余暇活動に取り入れること	3.64	.944	3.55	.926	.631
11．余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること	3.41	.975	3.30	.989	.739
12．余暇の過ごし方の技能を高めること	3.44	.965	3.29	1.035	1.027
13．4～5人程度の小グループによる余暇活動を取り入れること	3.12	.975	3.13	1.045	.067

14. 利用者が興味・関心を示す余暇活動の内容を提案すること	4.08	.843	3.90	.880	1.415
15. 余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと	4.00	.840	3.75	.926	1.946
16. 余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること	4.48	.608	4.12	.878	3.215**
17. 生活支援員等職員が提案して活動内容を決めていくこと	3.36	1.039	3.41	.912	.333
18. 10人以上の集団による余暇活動を取り入れること	2.50	1.049	2.71	.903	1.470
19. 地域の支援者の協力を得て余暇活動をすること	3.36	.981	3.32	.888	.295
20. 利用者に複数の余暇活動を提示すること	3.63	.946	3.48	.895	1.134
21. 利用者がさまざまな余暇活動を経験できるようにすること	4.06	.757	3.82	.849	2.055*
22. 余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること	4.22	.773	3.98	.828	2.048*
23. 利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと	4.03	.846	3.90	.891	1.037
24. 余暇活動の場所を確保すること	4.13	.823	3.82	.968	2.364*
25. 個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと	4.36	.750	4.05	.833	2.682**
26. 利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること	4.45	.730	4.18	.813	2.371*
27. 年齢に合わせた余暇活動を行うこと	3.98	.867	3.80	.901	1.396
28. 余暇活動において人との交流ができるようにすること	3.73	.963	3.56	.893	1.253
29. 余暇活動にボランティアを活用すること	3.56	.820	3.63	.897	.579
30. 余暇活動の内容が理解できるようにすること	3.87	.851	3.78	.862	.762
31. 地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をすること	3.44	.889	3.29	.966	1.106
32. 利用者に身近な余暇活動の内容を提案すること	3.81	.833	3.75	.763	.571
33. 余暇活動の種類を増やすこと	3.83	.958	3.50	.839	2.542*
34. 余暇活動で利用者が行きたい場所に移動できるようにすること	3.86	.935	3.63	.886	1.729
35. 余暇活動で公共交通機関を利用できるようにすること	3.69	1.119	3.48	.938	1.406
36. 利用者が希望する余暇活動を選択できるようにすること	4.09	.916	3.83	.876	1.976
37. 余暇活動について利用者が楽しかったかどうかを表現すること	3.63	.959	3.64	.850	.098
38. 利用者が楽しめる余暇活動については継続すること	4.33	.710	4.14	.780	1.733
39. 地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと	3.98	.920	3.66	.847	2.542*
40. 余暇支援が公的な支援として認められるようにすること	4.01	.988	3.91	.876	.730
41. 余暇の過し方に関する個別支援プログラムを作成すること	3.67	1.045	3.68	.921	.036
42. 余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること	4.23	.762	4.12	.844	.984

*p <0.05　** p <0.01

Ⅳ. 考　察

今回の調査において、自閉症児者の余暇支援に対して「20歳未満群」と「20歳以上群」に共通して関心が高い項目は、「余暇を穏やかに過ごせるようにすること」、「余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること」、「利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること」、「利用者が楽しめる余暇活動については継続すること」の４項目であった。自閉症者は、青年期・成人期になっても、他者との円滑なコミュニケーションをとることができないため、常時、社会適応上の問題を持っている。こだわり等周囲に了解できない行動があり、状態像を捉えることに困難さもあって、自閉症に対する周囲の理解が進まない（松

山・内田 2007)[10]。さらに、青年期・成人期になった自閉症者について、社会的自立ができれば問題はないが、そのレベルまで達しえなかったものの方が多い（村田 1980)[11]とされている。このため、自閉症児者を有する家族は、自閉症児者の生活の場における余暇活動について、穏やかに過ごせること、個人差を考慮すること、楽しい過ごし方を見つけること、および楽しめるものを継続することを望んでいると窺える。

自閉症児者への余暇支援に対する意識を問う42項目について、「20歳未満群」と「20歳以上群」の各平均値間を比較すると、有意差が認められた９項目（全項目の21.4％）すべてにおいて「20歳未満群」の方が平均値が高かった。有意差が認められた項目は、「余暇を過ごす技能を獲得すること」、「余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること」、「利用者がさまざまな余暇活動を経験できるようにすること」、「余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること」、「余暇活動の場所を確保すること」、「個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと」、「利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること」、「余暇活動の種類を増やすこと」、「地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと」であった。

したがって、自閉症児者を有する家族は、社会的行動が求められる成人期になる前に、余暇を過ごす技能、余暇活動に関する個人に応じた楽しみ方、さまざまな体験、本人の意思に応じたもの、場所の確保、個々に応じた内容、楽しい過ごし方を見つけること、および種類を増やすことを求めているといえる。また、地域社会に余暇活動の場を開拓することも重視していると窺える。そのため、自閉症児者を有する家族は、成人期になる前に、地域において有意義な余暇を過ごす技能を身につけるだけでなく、余暇活動の場ができるだけ広がることを望んでいるものと推察される。

地域で自閉症児者の余暇活動の支援をしたり広げたりしている、障害者支援施設の生活支援員は、自閉症者が示す感情の全般に関心を向けながら生活支援を行っているため（松山 2009)[12]、自閉症者の感情を推し量りながら働きかけをしていると同時に、自閉症者に対する働きかけ自体に価値を見出しながら日常生活支援を行っている（松山 2010)[13]。また、全てのライフステージにおいて、情緒を重視するという自閉症に特有の障害特性を考慮している（松山・内田 2007)[14]。地域において生活支援員は自閉症児者の気持ちを察し、その意思を推し量りながら余暇活動を楽しめる支援をするように心がけているため、家族が求めている余暇活動の支援に合致している。したがって、地域において自閉症児者の余暇活動に関するソーシャルネットワークを促進することで、より有意義な余暇支援がなされるようになるものと考えられる。

自閉症児者のライフサイクルにおいて、どの時期においても有意義な余暇活動を体験できるように支援がなされることが望ましい。したがって、今後、自閉症児者を有する家族が、自閉症児者のライフサイクルの各時期にどのような余暇活動の支援を求めているのか、また各時期においてどのような支援が必要なのかを明確にすることが課題である。

Ⅴ．結　論

本研究において、自閉症児者を有する家族は、自閉症児者の生活の場における余暇活動について、穏やかに過ごせること、個人差を考慮すること、楽しい過ごし方を見つけること、楽しめるものを継続すること、および成人期になる前に、地域において有意義な余暇を過ごす技能を身につけるだけでなく、余暇活動の場ができるだけ広がることを望んでいる。また、地域において自閉症児者の余暇活動に関するソーシャルネットワークを促進することで、より有意義な余暇支援がなされるようになると考察された。

引用文献

1）American Psychiatric Association. Diagnostic and statisticalmanual of mental disorders (5th ed.). Washington, DC. 2013

2）松山郁夫 自閉症児の療育（松山郁夫・米田博編著　障害のある子どもの福祉と療育）建帛社　137-148　2005

3）Brenda Scheuermann, Jo Webber, Autism: Teaching DOES Make a Difference　WADSWORTH　2002

4）松山郁夫　自閉症児者への社会的支援に対する家族の認識　研究論文集－教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集－　6(2)　1-12　2013

5）同上３）

6）伊藤健・菅野敦・橋本創一・浮穴寿香・勝野健治・片瀬浩　特別支援学校における余暇支援と社会参加に関する実態調査　発達障害支援システム学研究　6(2)　59-64　2007

7）松山郁夫　障害者支援施設における自閉症者への余暇支援のあり方：生活支援員に対する意識調査を通して　福祉研究（104）　58-65　2012

8）黒山竜太・高島恭子・豊島律　自閉症児の余暇活動における保護者の支援ニーズに関する研究　長崎国際大学論叢 11　67-73　2011

9）同上７）

10）松山郁夫・内田博昭　自閉症のライフステージにおける療育に対する直接処遇職員の捉え方　佐賀大学文化教育学部研究論文集　12　205-214　2007

11）村田豊久　自閉症　医歯薬出版　1980

12）松山郁夫　青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識　佐賀大学文化教育学部研究論文集　14（1）309-316 2009

13）松山郁夫　自閉症への生活支援に対する福祉施設の生活支援員の認識　佐賀大学文化教育学部研究論文集　15(1)　151-158　2010

14）同上10）

謝　辞

調査に際し、日本自閉症協会に所属されている皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。